



安富集記
十一

十一

1 曾 5
494
11



後院 上



後院

伊勢平

戴文記高關

一後院別當小右記云天元五年六月

五日乙亥

殿次參内以左大將為後院堀河院等

別當以左記

中將正清下官等為堀河院別當

本後院別當

○貞文按

下官卜八小右記記者右大臣藤原實資公

後院野宮

号也公事根源正月一日供御節供奈寬平二年二

月乃比後院乃別當善ト人ト作セトト每葺子調

在也ト江家次第八裏書云後院謂冷泉院

朱 雀院等堀河院ハ後院ト准ト別當ト重ル也

一木綿 延喜大學寮式云盛別真物韓櫃二合

各形

結木綿二斤八兩内藏寮式云木綿小二斤又云雜

色綾木綿大三竹二両別立 又云三島木綿四枚別
 枚 又鴨頭草木綿二十枚別 又云安藝木綿四枚
 十卜、見エタリ皆幾竹幾兩ト云ヒ又幾枚ト云
 布布ノ類ハ幾足幾端ト云然レバ式ニ云ヘル木
 綿ハ布類ニハ非ズ其木綿ハカデノ木、アテ皮白
 クシテ裂ケハ糸ノ如シ裂ガレハ紙ノ如シ大宇
 寮式ニ韓櫃ヲ結トアルハ是ヲ繩ニスルナルベシカデ
 ノ木ハ穀木也神事ニ用ルニフ木綿ト云ハカデ
 ノアテ皮本也トゾ今ハ紙ヲ用ニ引タスキハモ
 メニ糸ヲ用
 一放出 源氏物語ニ云々ならいでも有りハウダシトヨ

ハハ非也今昔物語北途大云前乃放出の隔子乃
 上よものひるやうよええ道むう又同書寛連ノ車
 よりあつてしりぬふハ糸の放出乃廣庶ある様
 のひるもはよ糸をよ糸をひて云々又同書平貞盛
 云法師やはおしりさうさうもをれむて真入り入
 其身ハ放出の方よ居り食さううて祓ぬ又同書鬼現
 人云云はしも基乃比して異なたえさう放出乃居
 ころ二人の侍よりすして居りさうさうさうさう
 屋よりつりけておしりさうさうさうさうさうさう
 どのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 ころ屋や母屋より放りさうさうさうさうさうさう
 下ノ字乃

如く横の畫ハ母屋より、豎の畫ハ放出也源氏物語
の注^ハくハさもやうな夕えがうき物下考

一 大間^{ヲリ} 今昔物語卷三今ハじう一十六代一條院乃

雨叶は上東門院もじつて内之系もせうひける小清原
風とあつてくせう皆多ひて免紙とくむ科り預
ふんやり小作給ひて弄とんく奉進とまけるく
四月は唐花のうはうくさねよりあや繪とせうけり
帖と云任大納言あうてよみ多ひけるすてよとの日
よありて^{中畧}ふやう物く陸奥城と書く物せ
おし殿とまうくうハ唐書とあてりあや重うあうけ
子れなは唐書法殿同二條の右長屋よりくく

とこどりの上運部殿と人許大納言ハ中下小ゆえか
くハ人給とと公あうく思ひて除日の大間殿上
よひきくく中りに皆人どくひらきえさくく小
おやあうくして讀とくく物く

むくさねのまきとん^そあひり唐の花いありやぞの
ろし物人^{名任}物たり

一 後京極權政乃歌新古今に入ふ

雲がうなとくひんてくる秋風と松くのうて月風
えふと那^ハ秋いとあうく俳細物^ハ物也^ハ貞久^ハよむ
色きわ^ハ
浮雲と吹くくひつる秋風ハ松くのこくして月とく

仙洞稻荷 伊は樂百音の内歌理火

雅水永

くづこちくじふるうらも園の戸はとあまの風を地
さむくして 妙歌理火とあまをさあしてささきれを
よめる也 貞夫がよむべきあま

國乃戸れとまされぬのさしきとあまをささきれを
の理火

九條右大臣尚書之乞巧真の歌

かーあひひのこしれさあまぬもまぬのる庭とて
もせり火 妙歌ひりりありとさ洞はいちひり
こことふぶれ又あまねとさ洞あまのわけてえり
やうまげえていりや貞夫がよむべきあま

かーあひひのこしれさあまぬもまぬのる庭とて
られり火 今堂上人の地トの妙といひ
やうまげえていりや貞夫がよむべきあま

一 著ノ字音ナヨ訓ハシロアラハスオイナヅルシロアラカジメ
○アキラカのアラハル○又音チヤク訓ツク○ラク○キル○
タシ著ノ本字也竹冠ナルヲ後ニ竹冠ニシテ二字ニ
シテ用ル也著玉篇云徐庶切筴也又陟慮切字彙
云陟慮切明也章也又職略切置也又直矜切附也
麗也又陳如切慧著稿預也洪武正韻彙編云陟慮
切被股也本作著今文作著又カ一曰直也字書ノ所見

同音者又略

如此俗ニハ竹冠ノ著字ヲバハシト云字ニノミ用テ
艸冠ノ著ノ本字ナル事ヲ知ラズ別ノ字也ト思
ハ誤也著ハ本字ニテ著ハ俗字ナリ此類イク
モアル事也説文ヲ初トシテ字書ヲハ常ニ見ベ
キ者也

一 一介染 保元物語ノ異本ニ安藝判官ハ一介染
ノ絹ニ白青ノ狩衣ト見ヘタリ一介染ト云ハ紅花大
一介ヲ以テ一匹ノ絹ヲ染タルヲ云是様色也日
本記紀略醍醐天皇記曰延喜十八年戊寅三月十九日
壬辰仰ス檢非違使來月一日可制禁色之由但以一紅
花大一介ヲ為深シ絹一匹之色給本様又仰彈正臺云

云法曹至要抄曰紅深延長四年十月九日宣旨云

紅染深シ色可禁制之由云延喜十八年三月十九日
給本様色絹已畢而年來之間不隨様色弥好深深
宜重下知從新掌會以後一切禁過アツカト案之件色雖
被聽禁色之輩依此制尚以不レ看用而不頼之類不
知憲法恣レ着用猶從破却可處管三十料直決放之
云々深紅ニ染タル衣ヲ服スル事ハ禁制也深紅
モ禁色ノ一也延喜十八年三月十九日ニ檢非違
使廳ヘモ彈正臺ヘモ深紅ハ制禁ナルニ若シ深
紅ノ衣ヲ着ル者アラバ咎メレ紀スベキ旨ヲ仰付
ラレテ絹一匹ヲ紅花大一介ニ染タルヲ授ケ

給ハレリ此縮ヲ本様ト云也 木様トハ此縮ノ色
 ラ午本ニシテ此色ヨリ染キハ禁制ナリ此色ヨリ
 浅キハ禁制ニ非ズト見定ル為ニ渡シ給ル故本様
 ノ色ヲ給ト云也 貞後又延長四年十月九日ニ除
 嚴シク禁制スベキ申ノ宣旨アリシ也 外ノ禁色ヲ聽
 サレタル人モ深紅ノ禁色ヲ着ル事ハナラヌ也 若シ禁ヲ
 犯シテ着ル人アレバ檢非違使歿へ召シ捕テ管三十ノ
 料ヲ課セテタ、キバナシニスルナリ 源氏物語ニスエツ
 ム花ノ卷ニ今ヤウ色ノ得ユルスニジクト云ハヤウ色ハ
 本様色ヲ云也 又同卷ニユルシ色ノワリナクハ
 シウニタル一童子トアルハ本様色ヨリモ浅キ色ヲ云

是ハ禁色ニアラ子バユルシ色ト云ナリ

一 草整サトシ 敷テ居ル者也 延喜掃部寮式云凡御座者
 清凉後凉等ノ殿設錦草整高麗錦表裏地 皇太
 子錦草整緑縹表長副錦 大納言兩面草整藍縹
 表緑緋略下 妃夫人錦草整黄地霞倉錦表紫地
 調布裏略下 尚侍女御錦草整縹地散花錦表青襦袢裏 四位
 命婦及更衣藏人兩面草整藍縹兩面表 五位 命
 婦及藏人青白椽草整青白椽緋調布裏 又同
 式草整一枚高一尺三寸表緑緋調布裏 又同
 圓座 右同式日蘭圓座一枚徑三尺厚一寸 蔣圓座一枚徑二尺五寸厚五分
 菅圓座一枚徑三尺厚一寸

一 燈油 同主殿式曰凡供御料用胡麻油自餘充雜
池供御料トハ御前始メ禁中ニトモス燈臺
一 金百兩源氏横笛巻よほ公のうらまき心ざし

熹乃きつ、柳木の遊云々せ、うせ、幸部王能く天
慶十年三月十九日の仲八條乃緒頼、修証誦、汝
金百兩納、瑠璃壺、施入の事あり。○貞丈云古書に
金幾兩とあり、ハ今世の金、百兩幾あるの事、は所
に皆、沙金のる也、今、の金、ハ唐長年中より、あまし
およて、古代、ハ、な、ま、お、や、沙、金、ハ、金、山、より、掘、り、た、ら
る、金、の、交、り、ち、け、て、あ、り、と、石、を、け、ら、く、こ、う、て、金、を

て、水、の、中、に、て、石、の、粉、を、令、と、て、ゆ、き、こ、り、け、て、石、を、粉、を、ば
ほ、し、捨、て、金、の、粉、を、あ、つ、め、る、が、砂、の、や、う、な、お、は、砂、金、とい
ふ、お、り、と、れ、を、信、又、ハ、壺、を、ど、こ、入、く、進、也、お、ど、し、
り、や、ま、砂、金、を、漉、は、ち、ふ、き、こ、う、て、黄、金、と、し、こ、う、り、ま、る
古代金銀を金中の貨とはせ、は通用とる也、は、漉、は、ち、
めて、あ、り、し、
一 楊子 源氏横笛巻、山中、ち、ま、ら、い、し、也、し、と、あ、ど
あ、や、し、や、ゆ、ら、ん、ず、り、の、後、の、山、お、し、う、り、り、
子、ま、ど、い、う、あ、や、の、海、好、云、墨、子、又、根、子、和、名、う、り、つ、り、
り、す、ぐ、し、あ、り、と、い、わ、り、お、け、の、つ、を、あ、の、け、ら、る、
あり、お、し、を、き、ふ、ち、い、り、か、く、あ、り、揚、子、内、ハ、糸、原、が、

黒漆標鈿物也葉子おどいけしそのこ内藏卷よ被
納し○又^右日本文の下のこのたうかのらいつ小何ん
三宮の元君の心所しつるせうとつるなり
敬采^{ウチミ} 保氏種苗の巻うらまふちりしなどしつる

事と孟津折におさあひ子のおびゆり付初来とつる
○貞土按今昔物語云今ハ昔ある人うたふべし下京
道と初見で具してゆりし事おとせうしつるの

人ハあしざりりり初見のゆへ乃よとち成ちうしつる
してかこしつるよ二三人ふりり初見の乳母ハ目とぬし
て思ふ乳とふくめて居るを初見とてうらまふの
戸と細あしあけて長守とてりり男ハ初見とてりり
るまふりて十人ふりり初見の乳母とてりりけし乳
母とてりりしと思ひぬるし初見の乳母とてりり初見
けし初見の乳母とてりり初見の乳母とてりり初見
まきの乳母とてりり初見の乳母とてりり初見の乳母
ハ初見の乳母とてりり初見の乳母とてりり初見の乳母
○皇子御誕生ノ時ウチニキスル事アリ榮花物語初花
ノ巻寛弘五年九月皇子生レタニヒ御湯殿ノ事記

タル条ニ雅通ノ少将ウテニキヲシノ、シリテ僧都ニラ
ナカケニオホ、シタマフソオカシキ今世食料米ヲウテ
フハアヤニリナリニキト女ノ詞ニイ
ヨ子トヨリ云ヘケシ

一 箸 古代ハ竹ニ削テ箸トスル也 延喜大膳式云箸竹
二百三十株又云箸竹七十株トアリ 此ノ箸ト削テ分チ
料ノ竹ト云コ 姓氏録卷十三云竹田邊連大明余
五世之後也 仁徳天皇御世大和國十市郡刑坂川
之邊有竹田神社因以為氏神同居住焉 綠竹大美
供御著竹因茲縣竹田川邊連
一 菅丞相崇 日本記略曰延長元年三月廿一日乙
未依皇太子卧病大赦天下子刻皇太子保明親王

堯一年天下唐人莫不悲泣其聲如雷舉世云菅帥
魂宿念所為也四月廿日甲子詔故從二位大宰權
帥菅原朝臣復本官右大臣兼贈正二位宣宣昌泰
四年正月廿五日詔書○貞文云醍醐天皇ハ菅原
道真カ賢才ヲ認シテ時平ノ讒言ヲ信ジテ罪ニ
處シタコヒシハ能ク人ヲ知ラザル闇主ト云ベ
シ保明親王ノ堯ニ給ヒテ帥菅師ノ所為也ト云
シハ何ノ證有テ云シヤ唯推量ノ浮説也其説ニ
驚テ本官ニ復シ正二位ヲ贈リタコヒシモ愚也
延喜ノ聖帝ト後世ニ稱スレドモ聖君ニハ非ズ
又按昌泰四年ヨリ延長元年ニテ廿三年ヲ歷タ

リ管師實ニ崇リヲナシタルナラバ何ゾ世三年ノ久シキヲ持侍タルヤ笑ベシ又按右ノ日本紀其聲如雷舉世云管師魂病念所為也ト云フ文ヨリ思ヒ付テ延長八年六月廿六日庚ノ清涼殿ノ霹靂ヲ管丞相ノ雷ニ成リ夕ニヒシト妄説ヲ作リタルナルベシ此時ノ雷ノ事ハ日本紀管師ノ所為トモ何トモ記サズ管丞相ノ所為ニシテハ是ハ昌泰四年ヨリ延長八年下テ廿八年ノ間甚延引シタル崇リナリ俗人ハ管丞相ヲ貴ク云ントテカ、ル不暫ノ説ヲ作テ却テ惡クシナシタルナリ

一 弘法大師 弘ノ字漢音ニテハ音コウ也吳音ニテハ音グ也佛經佛名ハ吳音ヲ用ル事ナレバグハウ大師ト唱フベシコウハウ大師ト唱ルハ非也弘指弘通皆

一 八朔賴之祝 賴長明口李物語云秋上のはんこらよハサみのひのはいふふとてむう秋のてふれさふら御世なりよめてはせよつう皆多ひて昭宣公のうくしのせよよまきしあうりちくれくまむいとの年のひよせよとて奉りりつらぬらぬあどらの事はあまたおなじな月とあはさうくかたやうやけりる年

ハこの事新く其事より年々の志申うてまう
すといつてふおぞ今ハ何まじくなく
ま何るあり○貞あま長明が田守お借書やハ羽
後のおこり 正史貴徳よんえは月事新く柳花
葉系のお中と魚ササガハハ
カシラズ
一 嘉祥ノ祝 又之嘉祥とあきて仁明のまづらふ葉和の
比おのし世れまう事といのせおらして尚はよの
や一後とすしてわらひまをいひたり
六月十日あまう六日らん吉日あまむハトのらくわうぐ
一 せはとてその日おこまふ事ともしりて
嘉祥とせし長く其事嘉祥と年号とす

きざしせし中當社縣主お殿の通幹が日祀とす
○貞あま長明正史貴徳よりあまの事ともしりて
と魚うげ田守お借書やハ羽後のお長明が名を借りて
仍代しとす

一 田樂 今昔物語卷十 近江国天龍郡司 云々付白装

ホーの習はる件のおひきとせし 今昔とひきと
ある田樂と勝とひひつけ左右のものと様とらひ
きとゆきとばきれとけしての田樂と二つ
物とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆひつけとハ田樂は名れやうとゆきとゆきとゆきと
あす田樂の節とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

まのの田樂やニツのニツのくはくけてとるし田樂り
月ふりし物と云能ニラ笛ニツのや一ツのやニツルニツと
りつゝ用ふとふとふと

一 冠位十二階 日本紀ニ推古天皇十一年十二月
冠位十二階ヲ定メラル冠ノ制ヲ以テ位階ヲ分
ツ也其冠位ノ名徳仁禮信義智ノ六ツニ各大小ノ
字ヲ添テ稱スル故十二階トナル也釋日本紀曰
私記曰大徳師説今之小徳五位大仁六位小位六位大礼六位
也小礼七位大信七位小信八位大義八位小義八位大智初位小智初位
也○貞文云右ノ師説誤也推古ノ時ニハ大徳以
下小智以上唯十二階ヨリ外ハ十三文武ノ時至

テ三十階ヲ定メラル是今ノ位階也後ノ三十階
ヲ以テ前ノ十二階ニ引當ルニ十二階ト三十階
ト階ノ多少同ジアラザルヲ強テ引當ントシテ
下ノ大智小智ト初位トヲ引當テ段々上へ引當
テ昇ル故大徳ト四位ト相當スルカ如シ如此引
當テ見レバ推古ノ時今ノ三位以上ニ相當スベ
キ位階十三推古ノ時ニハ位唯十二階アリ文武
ノ時以來三十階ニ成リタリトバカリ心得レバ
闕タル復ナシ代々ノ制異也十二階ニ強テ三十
階ヲ引當ルハ甚誤リ也別々ニ心得ベキ事也又
云或曰十二階ノ冠ノ色大徳小徳紫大仁小仁青

大礼小礼赤大信小信黄大義小義白大智小智黒也ト貞丈云右五色ノ事日本紀推古十二階冠位ノ條ニ見エズ釋日本紀ニ七見エズ後人仁義礼智信ヲ五行四方並ニ中央四時並ニ土用ヲ五色配合スル理ニ據テ云ル事歟理ハ然アルベキナレ共日本紀ニ各其色ヲ載^載ガレバオボツカナシ別ニ制作差別アリシヤ詳ナラズ日本紀皇極天皇二年ノ記^紀ニ冬十月壬子蕞我大臣蝦蟇^{エニシ}縁^縁病^病不^不朝^朝私^私授^授紫冠^{紫冠}於^於子^子入^入鹿^鹿擬^擬大臣^{大臣}位^位トアリ此紫冠ト云ヘルハ大徳ノ冠歟小徳ノ冠歟詳カナラザレバ定テ云ガクシ

一冬至 俗ニ冬至ハ唐ノ正月也ト云ハ十一月ハ子ノ月也周ノ世ニハ。子ノ月ヲ以テ正月トセリ冬至ハ十一月ノ中ナレバ唐ノ正月ト云ナルベシ野俗ハ歷代ノ國号ヲ知ラ子バオシナヘテカラト云テ唐ノ字漢ノ字ヲカラトテ^云字ニ用ユ其例ニテ周ノ字モカラ也一タバカルト云詞古書ニタバカルト云ハ唯ハカリコトヲ云也タクミハカルノ略語歟今世ハ偽リ欺ノ妄ヲノミタバカルト云リハ愚キ謀計也古代ニハ善キ謀計ヲモタバカルト云日本紀ナドニ見ユタリ源氏物語ナドニモアル詞也

如此ノ詞ヲモ知ラズ今ノ俗語ヲ以テ書ヲ解ス
レバ大ニ文義違フ交アリ

一 詠聖徳太子ノ歌 此日本紀竟真ノ歌ヲ寫シテ彼
ノ歌ノ風ニ效ヒテ聖徳太子ヲ詠ス 貞文

みいめえみいハ西乃えいすうり 王竺ハ西乃てうり月とけと
うてあまうり。のりキミトハ皇太子ヲ云
ひばきみこふいのえみいれらひらめかんよ乃
てあまうり

一 姓字訓 日本紀竟真歌ニ式部卿是忠

あほくれむのくうちきよけとばよにれるたみん
かみねとまのしスミヤクム 此歌元茶天皇の山付万氏の姓氏
乃みよて真偽りくらがうり一と勢湯と探しせ 俗二曰
湯起語

一 書偽を正しうひ一書をよめる也かぶるとよめるハ
姓ノ事也

一 日本紀通證 近年印行セリ其注群書ヲ引證シ
テ詳悉ナル好書也然レ昔舊事本紀兵ニ舊事大
成經ヲ偽書ト知ラズシテ引用タリ是其瑕瑾也
博覧ナレドモ眼ノ明ラナラザル所ナリ惜ベシ
又伊勢五部書ヲモ引用タリ偽書ヲ引タル不語
リ也

一 帥字音訓 帥ハ字スイノ音ニテハ將帥元帥十
ト、連子元大将事也又ソツノ音ニテハ卒ノ字
ト同ニ義ニテヒキ井ルトヨミテ引卒スル交也

カレバ太宰帥すけの太宰府ノ大将ナル故太宰ノス
イトコソ唱フベケレ太宰ノソウト唱へ来レル
ハ語リナリト荷田カダ在満ミツガ云シゲニコトワリ也
足ノ享音ソクトヨメバアシ也音スウトヨメハ
タル也物ノタラスヲバフスウト云フベキ也不ソ
クト云ハ誤リ也出ト云字此方ヨリ出ルハ音ス
イ也彼方ヨリ出ルハ音シユユ以也サレバ出奔ハ
スイホントヨムベシ此方ヨリ出テ走ル也彼方
ヨリ走テ来ルハシユツホニ也如此ノ類イクテ
モ有ベシ心ヲ付クベキ事也

一 青侍青女房 是ハ人ノ位ノ程ヲ菓ニ譬テ云詞

也菓ハ初イニ夕熟セサル間ハ青クテ後ニ熟ス
レバ赤クモ黄ニモ紫ニモナル者也人ノ位ノ賤
シクテイニ夕官位昇進モナキヲ菓ニタトヘテ
青侍青女房ナト云ナリ年ノ若キニハ非ズ

一 蕪 俗ニ蕪ヲニラト云フハ語也本名ミウ也和
名抄ニ蕪和名於保美良蕪和名古美良トアリ大
ミウ小ミウ也日本紀神武天王ノ御歌ニモ弥羅
トアリ

一 ホゾチ 清慎公集ニ云女侍すめこよわぢら中と
かひつよいまでとくせまへをゆあうらのすけ中ハ
ふトよとらしたるまがねさうせうれび

りと人ハカゞらやんくし多やねをかしうや
 うてやれうくし 和名抄ハ熟瓜和名保曾知俗
 用熟瓜ニ字或説ニ極熟蒂落之義也とりりりど
 ちハやどあらハ略語うううのむ物うみううと
 かのばううやどもあまはるねるどちとや也是今
 俗ハはらうやとておめじまうくしうやとて甜瓜の
 名とわゆるハ非や 濃園本草^{モリス}那真菜と云地
 西^ミて瓜ハ甜瓜と云味すべしてうき
 瓜^メ味もろや他^ミ布^ミて瓜ううとて真菜瓜と云ハ
 非や甜瓜と書てカウウリトヨム 糖ううと汁ハ
 之や白瓜きうり^メハ^メは^メ瓜と名け^メる物多^メ

中ハ唯甜瓜のうとうと云ふ中ハ瓜もうめ
 多^メ中^メハ唯瓜のう花と云がや^メ又^メう^メあ^メ子^メと
 瓜と書く^メう^メう^メと書^メて^メふ^メと^メ書^メす^メ
 つ^メひ^メの^メ名^メや^メと^メし^メ説^メあり^メま^メ語^メき^メう^メふ^メの^メ字^メと^メ云^メ
 並^メて^メう^メと^メ云^メ古^メ例^メ云^メし^メ和^メ名^メ抄^メ字^メ例^メと^メ書^メし^メん
 う^メと^メ書^メく^メと^メ云^メと^メ云^メし^メ定^メ名^メ假^メ名^メを^メい^メは^メる^メと^メ云^メ
 書^メハ^メ日^メ本^メ紀^メ古^メ事^メ記^メ万^メ葉^メ菜^メ之^メ外^メの^メ古^メ書^メ乃^メう^メな^メば^メう
 ひとお遠^メする^メ事^メあり^メ 俗^メ説^メを^メい^メは^メる^メと^メ云^メ
 一親王 皇子^メけ^メこ^メひ^メて^メ後^メ醍^メ醐^メ親^メ王^メ宣^メ下^メあり^メて
 菜^メ親^メ王^メと^メ稱^メし^メり^メ位^メと^メ一^メ位^メ二^メ位^メと^メい^メは^メぶ^メ一^メ品^メ二^メ品^メ
 の^メど^メ之^メ位^メと^メ任^メじ^メ給^メつ^メハ^メ中^メ督^メ々^メ武^メ部^メ々^メ等^メ部^メ々^メ又

上総上野常陸等此守と任じし事大守と稱する
也今後と云ふ親王と云ふ又任じりて守臣と稱
す又親王宣下ありて後姓氏と賜ふ親王乃
稱と止て人任じりし事あり一生親王と稱
すありし事等ハ常例に依り小醜翽天皇乃
皇子兼明親王昭平親王等ハ初め親王宣下な
くして後羽衣の姓と給ふ人任じりし事兼
明ハ方古任一任と云ふ昭平ハ西口任下行左大臣
と云ふ事ありし事圓融院貞元二年四月廿一日幸
亥詔して有人任じりし事親王と云ふ給ひし事
日本紀^紀卷之八(一)兼明ハ一帯と叙し官ハ中

督卿と任じりし事龜山と隱居し給ひし事
世々前中書王
と云ふ事なり昭平と云ふ事なりし事
常例と云ふ事

一へえめ字へ字古書ニハエニ作ル小野道風ガ
真蹟ニモエニ俗^作レリ也片字ノ省也片字俗
片ニ作ルヲ省テトナシ乙轉シテヘトナリ夕
ルナリ一説ニエ字又邊字ノ省也ト云ハ非也
白石ハ穴ノ省也ト云是モ非也又元ノ字エトヨ
ム元ノ字ニハ非ズ元ノ字ニエノ音訓ナシ元ハ
衣ノ字ノ草書之ヲ略シテトナシタル也云如
此尻ヲ下へハ子テ書ベキヲハ子ヌシテ元如此

ニ書クユヘ元ノ字ニ紛ル也又メノ字ハ女字也
古ヨリ女男ヲめトヨミ来シリ然レハ女字也
一説ニ面ノ字草書也ト云ハ非也或説ニヘニ
片定ヲ用ヒメニ女字ヲ用タル例日本紀古事記
万葉集等ニハナシ然レハハ片ニ非スメハ女
ニ非スト云ハリ是狹ク拘リタル説也假字ハ字
ノ音訓ヲ假リテ用タル者ナレバ此文字ヨリ外
ニハ用ズト云定法ハナシ古代日本紀古事記方
葉集ノ外ニ假字ヲ以テ書シ物イクラモ有シナ
ルベシ其中ニハヘニ片ヲ用ヒメニ女ヲ用ヒシ
モナドカナカラガラニハカメカナノメ字ハ女

ノ字ノ省ケル也是又一證ナリ和名抄ニモ兩和
名阿^ア如^メ梅和名字女ト女ノ字ヲメニ用ヒタリハ
ニ片ヲ用シ例ハ是アタラズト云ヘトモ既ニ古
書ニヘヲ用ヒタレバ片ノ字ヲ用ヒタル書モア
ルベシ此形ハ古書ニハナシ古書ニ及返篇遍邊
便^ヘ辨^レ何^レモ^モ皆^皆等ノ字音ヲ假リテヘニ用ヒタレ
バ此外ニモヘニノ音アル字ヲバヘニ用ユベシ
ナレバ片ノ字モナドカヘニ用ガル事アラスヤ
一高野玉川高野山ノ奥ニ玉川ト云隴川あり此水
毒水也故ニ弘法大師人ノ此水ト云人等心
遠く欲^クヤ^ヤ人^人ヤ^ヤい^いま^まし^しの^の重^重れ^れし^しり^りと^と詠^詠ふ^ふ

ワをいしてらんやいじん 旅人の言野めなく乃玉
川の水世よ傳くく弘法大師のあつがき珍た
めし加持祈禱ありしつるく水より西にわた
して水と偏しめ草をか持して石よりいふを去
ると言つり 我をいして山を去る毒水ありと何や
てか持して毒水と棄して葉の水といふをい
しや葉の水をいして葉と棄してのじ事はいまし
め並ぶるくはいぶくしき事とせぬ水の水と
ちさずいしせうて毒水に常の水とあつがき
らんよししりの説とあつぬんは水とのしり
らん水をかきして大師の法にえんといふ

あるこゝろしりふやま言ふと翠糸といひ

一常世國 トコヨノ國トヨム也日本紀云垂仁天

王九十年春二月庚子朔天皇命曰道間守遣常世
國令求非時香菓 香菓此云 箇俱能赤 今謂橘是也九十九年
秋七月戊午朔天皇崩於纏向宣時年百四十歲冬
十二月癸卯朔王子葬於菅原伏見陵明年春三月
辛未朔王子田道間守至自常世國則賁物也非時
香菓八竿八纒焉田道間守於是泣悲歎之曰受命
天朝遠往絕域萬里臨浪途度弱水是常世國則神
仙秘區俗非所臻是以往來之間經十年豈期獨凌
岐瀾更向本土乎然賴聖帝之神臺 是カ 僅得還來今天

皇既崩、不得復命、臣雖生之、亦何益矣、乃向天皇之
陵、叫哭、而自死之、羣臣聞、皆流淚也、此文ヲ以テ
考ルニ、常世國トハ、神仙ノ居ル所之國ヲ云也、常
世トハ、春夏秋冬ノ往来、變易ナク、常ニ一氣ナル
國ナル國ヲ云フナルベシ、常ノ國ニ異ナル故、神
仙ノ國ト云ナラニ、白石翁ガ採覽異言西川、怒軒
ガ華夷通考ナドヲ見ルニ、天竺國ハ、熱國ニテ
常ニ夏ノ如クニテ、四季ノ差別ナシト云ヘリ、此
類ヲ常世ト云ナルベシ、非時ノ香草ト云ハ、凡木
菓草蔬ノ類ハ、秋熟シテ有リ、冬ハナシ、橘ハ、冬ニ
至テ熟スル故、非時ノ香草ト云ナルベシ、曼仁天

皇ノ時ハ、イニタ、三韓ノ人モ入朝セガル時ナレ
バ、外國、橘ト云菓ノアル事ヲ語ル人モアルベシ
キニ、天皇ハ、イカニシテ知タニヒケニアヤシキ
事也モシ、橘トハ思ヒ定メ給ハズ、何ニテモ時ナ
ラヌ、又菓外國ニハ有ルベシ、尋子求メテニ井ウセ
ヨト詔アリシナルベキ、欽田道間守モ何ノ菓ト
モ何ノ國トモ思ヒ定メズ、只偶然トシテ海ニ浮
ヒ行ツ、幸ニ橘ノアル國ニ至リテ、取り來リシ
ナラニ、カ海洋ヲ迷ヒ行シ、故往還ニ十年ノ春秋
ヲ送り、其國ノ名モ知ラズ、トクヲヨノ國ト
ノミ云シナルベシ、十勞百苦ニテ歸リ、天皇ヲ悅

バシメ奉ラント思ヒ設ケシニ思ヒカケス崩御
ナリケレバ陵ニ向テ叫哭シテ自ラ死シケン事
ゲニ左モアリヌベシ心ノ中思ヒヤルベシ伊勢
カ歌ニサツキニツハナクナノカラカゲハムカシ
ノヒトノワゲノアズスルトヨメルハ五月比橋
花ノ香ヲカギテ古人田道間守カ事ヲ思ヒ出セ
ルナルベシ

一 三神 三社託宣として依化してよめよ天照大神
八幡大菩薩春日大明神と申すと依和歌乃之神とて
依古よけ鳥人丸の之神と申すと依年神の之神と
て八幡大菩薩神功皇后武内宿禰の之神と申すと

す。類ハ阿蘇院乃三尊の事と云ふ。めづる。一。是。と云
字と繪と書き或ハ本像全像をなす事ハ佛法にて
す。事や物の形を依てなすと云ふ。此ハ佛法にて
いふ事。佛家にて佛法と云ふ。いふ事。釋尊ニツチハ孔子
等ハ十哲の画像と云ふ。是佛家の事。の。後。の
事。也。周易の事。いふ事。ハ。易の。四聖人乃画像に
依て。之。希。少。て。著。也。か。ぎ。ハ。半。分。と。ル。の。画像。ハ。佛。去
乃。事。乃。事。也。

一 古學 近世古學といふ事。是。古。て。經。傳。を。説。く。事。
古。は。乃。録。事。也。の。づ。く。宋。朝。の。程。朱。乃。説。也。排。り。一。詩。文
文章ハ漢唐乃古風と云ふ事。是。事。ハ。詩。文。乃。傳。り。事。

鳥ハ四足ニアラザル物ナレバハ作ルハ誤也上古
字ノ作りヤウニ六ツノ法アリ是ヲ六書ト云此六書ノ
法ヲ知ラザレバ字昧ノ正シキト誤トハ明カナラザル
也六書ヲ知ラント欲セバ説文韻譜ヲ始メトシテ
篆學ノ書ヲ見シバ知ル也

一 三種神卷 八咫鏡 草薙劍 八坂瓊曲玉 是ヲ三種
神寶ト云 ○八咫鏡ハ神代ノ物ニテ今伊勢太神
宮神祇也今禁中ノ内侍所ノ神鏡ト云フハ崇神
天皇時新ニ模シ作ラレシ物也圓融院ノ天曆四
年九月廿三日内裏焼亡時模シ神鏡焼損シタレドモ
破レズシテ其質ハ存セリ日本記卷ニ見エタリ禁

秘抄ニハ焼カシテ南殿ノ櫻ノ枝ニ繫リテ在リシト見
エタリ兩説也後朱雀院ノ長久元年九月九日内裏
焼亡ノ時模ノ神鏡焼損シタリ此時ニハ焼テ碎ケ破レ
テ五六寸計アルニ其闊^{ワチ}屑^{クサ}或ハ二三寸計或ハ二三粒
計拾ヒ集メテ納メタリト百練抄ニ見エタリ二度
焼テ二度目ニハ焼碎ケ破レタル也今内裏^侍所ノ神鏡
ト云フハ此二度焼タル鏡ノ闊屑也 ●草薙劍本ノ
名ハ天叢雲劍素盞鳥尊ノ物ニテ天照太神一獻
シタニヒシ也崇神天皇ノ時皇女豐^ヒ入^ヒ姫尊ニハ
八鏡ニ副ヘテ草薙劍ヲモ持シメテ太神ノ宮處
ニスベキ地ヲ求メサセタマヒ至仁天皇ノ時皇女

倭姫命ヲ以テ豊稻入姫ニ代ラセタニヒテ宮處ヲ求
メタニヒ神教ニ依テ伊勢ノ五十鈴川上ニ宮處ヲ
定メタニヒシ時ニ鏡モ劔モ伊勢ニ在リ景行天
皇ノ時日本武尊東夷征伐ノ時日本武尊伊勢ハ
諸夕ニヒシ時倭姫命天菟雲ノ劔ヲ日本武尊ニ
授ケタニヒシヲ日本武尊是ヲ佩テ東征シ夕ニ
ヒ野火ノ難ニアヒタニヒシ時燒草ヲ薙拂ヒ災
免レシニ依テ草薙ノ名アリ東夷ヲ平ケテ尾張
ニ至リ近江ノ膽吹山ノ惡神ヲ平ケシトテ山入
リ大蛇ノ毒氣ニ中リ病起テ薨シ夕ニヒリ其時
草薙劔尾張ノ宮黃姫家ニ解置テ出給ヒタレバ

薨後ニモ劔ハ宮黃姫ノ所ニ在リシ也其後劔京ハ
送り天皇ハ獻セラレシト見ユテ天武天皇朱鳥
元年六月己巳朔戊寅^{十日}天皇ノ病ヲトフニ草
薙劔ニ崇レリト云フニ依テ尾張國熱田社ニ送テ
置クト日本紀ニ見タリ是ヨリ草薙劔ハ熱田社
ニ神劔ト成レリ内裏ニ在ル宝劔ハ崇神天皇ノ
時ニ新ニ草薙劔ヲ模シ作ラレタルヲ代々傳タ
マヒシ也安徳天皇ニテ模ノ神劔傳リシニ平家
一門西海ニ赴キシ時文治元年三月廿四日ニ位
后天皇ヲ抱奉リ寶劔ヲ執テ海ニ没シケル故宝劔
此時海ニ沉テ搜リ求レドモ再出ズ永亡ヒタリ

其後寶劔ノ代リニ追考連東記ニ何ノ劔ヲ用ヒラハヤ新ニ
作ラレシヤ未詳○八坂瓊曲玉ハ一名神具トモ
云歟天照太神御孫ノ瓊杵尊ニ宝物ヲ讓リ授
ケ賜フ時ニ寶鏡ヲ授ケタマヒシ事日本紀ニア
リテ劔玉ノ夏ハナシ又一説ニハ鏡劔玉三種ヲ
授給フトアリ此兩説トモニ日本紀ノ一書説也
古事記ニモ三種トアリ古論拾遺ニハ八咫鏡及
草薙劔ニ種ノ神寶ヲ授賜永ヲアツルニ為天璽アリテ註ニ
神璽之劔鏡是也トアリ然レバ神璽ト云ハ鏡劔
ニ種ノ惣名ニテ玉一名ニハ非ズ其外律令格式國
史等鏡劔ニ種ヲ舉或ハ神璽之鏡劔トノニ記シ

テ玉ヲ云ハズ然ラバ玉ハ人代ニ傳ハラザル歟古記
寶錄ニ皆玉ヲ舉カシテ鏡劔トノニ記セリ今世
三種神器ト云ハバ今モ玉有ルガ如シ未ダ詳ナラズ後代
ニ至テ公家衆并ニ神道家等神秘深秘ナト云テ
有ル物ヲ無シト云ヒ無キ物ヲ有トスラガ如クナル説
ヲ作り出シ牽強附合ノ理説ヲ設ケテソレヲ隱穩秘シテ
神代ヨリノ口傳ナト、偽ル類アリ今世ノ人ノ言フ事
ハ一同取ルニ足ラズ唯古書ヲ信ズベシ古書ノ中
ニモ舊事本紀ノ如クナル古キ偽書モアリ三種神器
ノ事ニ付テモ様々妄説多シ庸才ニテハ惑フ事多
シ○又曰八坂瓊玉ハ今モ有ルガ否歟知ラズ神

神鏡ノ模シ物ハ二度ニテ焼テ碎ケ損シ神劍ノ模シ物ハ西海ニ沈テ出ズ是朝過ニ王政廢シ万民無育ノ志ナク唯沃遊淫樂ノミラ事トセラレシ故鏡劍モ亡ビ失セラ終ニ天下ノ國群郡ハ武士ニ奪ハシタニハリ聖德太子佛法ヲ弘メタニハ朝廷衰敗ノ基ヲ開カレシ也佛法ヲ信ズレバ心懦弱ニナリテ方正ナラズ方正ナラガル故沃遊淫樂ヲ好ム也物部ノ尾書中臣鎌子物部守屋中臣勝海等ノ賢臣佛法ヲ惡ミテ君ヲ諫メ奉リシ忠臣金言十年ノ後其ノ徵著ハレタリ

一 湯卷 今本 今支 此ニ一物也貴人御湯殿

入リし時湯ヲテセテする女房常の衣被乃上ト月ハ忘るル白手ハ湯の衣の事也侍中群要第五云今支ト云奉仕第湯殿ノ人所看衣ナリ生白絹也○兼花お浴ハ寛弘五年九月十日中宮彰子後一條後トみ々ハ書ハ女房ハ白ハ禁秘トてハ申ハ○禁秘ト抄ハ恒例毎日早且供御湯主殿官人奉行ハ近代ハ金ト殿運湯ハ中ハ忌中着湯卷上ハ一人典侍一人也是候御湯殿故也○東鑑第四十二ハ建長四年壬子四月朔日ハ御小袖十具御大口一庸織物御衣一領御明衣ハ今本ハ一

一 風水教人 尾張国 東照宮ノ神主古見左京大夫
源幸和ノ号也 國學ノ豪傑也 著述多シ好テ巫學家
ノ偽作妄説ヲ論辯シテ排斥ス其説快然タリ唯舊
事本紀ヲ偽書ト知ラカル歟知レトモ古キ偽書ナル故
取捨スル歟不爽事也惜ム可シ然レドモ明智ナ
レハ後ニ啓發スル事アラユル予不相識ノ人ナレ
トモ為ニ憂之

一 神道 日本紀用明紀曰 天皇信佛法尊神道又同
書孝德紀曰 尊佛法輕神道云々 此神道ト云ハ後
代ニ行ル所ノ神道ト云一道事ニハアラズ神祇
ヲ崇祭スル道ヲ云也 右ノ輕神祇ノ註ニ 削生國魂社

樹之類是也トアリ道ノ字ニ深ク注ムヘカウズ今世ノ神
道ト云フ物ハ後代ニ建立シタル一道ナリ

一 王仁 ○阿直岐 古事記ニ 王仁ヲ和迹ト記セリ
然レハ王仁ト日本紀ニアルヲバワニトヨムヘシ又阿直
岐ト日本紀ニアルヲ古事記ニハ阿知言ト記セリ然レ
ハ阿直岐ヲアチキトヨムヘシ 王仁ヲワリニ阿
直岐ヲアトキトヨムハ誤也

一 踐祚 踐祚モ即位モ同事ニテ差別ナシ後代ニハ
太子先帝ノ禪リヲ受ケタニヒイマダ大極殿ニ出
テ即位ヲ群臣万民ニ告ケ知ラセタニハ大極殿ニ出
踐祚ト云ヒ大極殿ニ出テ即位ヲ告ケ知ラセタニ

此證文下ニ記見合ス

フ禮ヲ即位ト云テ差別アルガ如シ
一 聖字訓 ヒシリトヨムハ日知ノ意也其明智日光ノ如シ
ト云説アリ愚按ニハヒトリシルノ畧語ナラム人ニ
就テ學バシテ天性獨リ自ラ明智也
一 仙字訓 日本紀雄略紀ニ十一年仙衆二字ラヒシリト
訓タリ聖モヒジリ仙モヒジリトヨミテハ差別ナシ聖又
ト仙人ハ其徳大ニ異也日本紀ノ訓ノ中ニハ甚モコリ
テ付タル訓アリ仙ノ字モ訓ノツケカタニ。コリ
テヒジリト付タルナルヘシ後代ノ歌ニハ仙ヲヤミト
ヨムモコリタル訓也仙術モ知ラス常人ニテモ山中
ニ居住スルハ山人也仙人ニ限ルベカラズ仙ノ字偏傍ヲ

ニツニ分テ山人ト云歟是モコリテセンカタナキ訓ナル
ベシ上古ヨリ吾邦ニ仙人ト云フ者ナキ故仙ノ字ノ訓ハ
ナキ也久米仙人ハ吾邦ニ仙人也ト云フ者ナキ故リ
カナシサバカリ妖術ヲ行ヒシ者ヲ後ニ唐ノ仙人
ノ説ニ擬シテコトクシフ云ヒナシテ久米仙人ト云ナ
ルヘシ久米仙人ノ事元
亨秋書ニアリ仙ノ字強テ訓ヲ付ベキナラハ
クシラドナトモ云フベキ歟クシハ奇ノ字セクシ
トトヨム也其ノ字異ノ字モクシヒトヨム是古訓也ウ
トハ人也高人ヲアト間人ヲハシ藏人ヲト高麗人ヲトナ
トノ例也仙人ハ奇異ナル事ヲスル者ト云長生スルト
云モ奇異ノ一ツ也サレバクシラドヨムヘキ歟○又云

久米仙人ハ衣洗フ女ノ脛ノ白キヲ見テ通^ツヲ失
ヒ雲ヲフミハツシテ地ニ落タリト元亨釋書及
ツレ^ク草十ドニ見エタリ

一 天地開闢

日本紀神代上曰古^{イマ}天地未^ク割^レ陰陽不

分^モ渾泥^ニ如^ク雞子^ノ溟^ク洋^ニ而合^レ牙^ヲ以下貞丈按天地イニ

夕割^レシナル時イニ^ニ萬物生セサラニ^ニ牧萬物生

セサレバ^ハ國常立尊ヲ始^メノ人ハ一人モ生ズニ^シキ

ニ天地イニ夕割^レシナル時ノ形ハ鳥ノ子ノ如ク也

シヤ狗ノ子ノ如クナリシヤ誰カ見タルモノア

ルニト神代卷ノ文ハ淮南子ノ文ニ據テ書タニ

ヘリト云ヘリ漢土ノ書ニ據リタレバトテモ漢土ニ

モ天地イニ夕割^レシナル時ノ形ヲ見タル人ハアルニ

淮南子ニモセヨ神代ノ卷ニモセヨ理ヲ考ヘ推量ヲ

以テ書キタル者也凡推量ハ思ヒノ外違フ事ア

リ天地開闢アリシヤ又開闢ト云フ事モナク元

ヨリ今ノ如クナル天地ニテアリシヤ知リ難シ

カノ鶏子ノ如クナル時其鶏子ノ如クナル外ハ何

ニテアリシヤイブアシ或形ニ拘リテ論スルハ思

地理ヲ推シテ考フベシト云人モアレトモ其理ヲ推

ス物ハ人ノ智也人智ニハ限リアリ天地ノ理ハ

限リナシ限リアル人ノ智ヲ以テ限リナキ天地

ノ理ヲ推シ窮メガタシ天文曆道ハ日月星辰行

度以定數アル事ナシハ其定數ヲ捕所ニシテ推
シ窮ル也捕へ所ノナキ事ニ理ヲ付テ之ハ皆推
量沙汰也今日見ル所ノ天ノ外ハ何物ゾヤ理ヲ
以テ考へ難シ此世界ハ天ノ内ニ包ミレテ有内
アレハ外ナキ事アラシ哉知レズ事ハ知レ又ニシテ
ナシ置ベシ猥リニ理ヲ作ルベカウズ理ヲ作テ益
無キ事也世ニ理ヲ云フ事ヲ好ム者理ノ考ヘラレ
ナル事ニ當テハ是理外也ト云テ止ム人アリ理外
ト云フ事ハナシ皆理内ナレドモ人ノ智ニハ限リア
ルニ限リナキ理ヲ窮メ尽ス事ノカナハ又也人智及
ハナル所トハ云フベシ理外也トハ云フ莫勿レ

一 未来記 天王寺ニ聖徳太子ノ未来記トテ太子ノ
薨後末世ノ事ヲ豫テ記シタコト書アリトテ楠正成
其書ヲ并見セシニ當時乱世ノ事ヲアリト記シ
官軍利ヲ得テ関東ノ北條ニブヘキ趣キノ文ナ
リシカバ軍兵皆富ニ進シ事太平記ニ見ユタリ是
楠が秘計也聖徳太子モ人ノ智ニテ未然ヲ
悟ルコトハナラヌ事ナレハカノ未来記信ジ難シ
ト云ヘハ或僧云太子ハ權者也佛ノ化身ナレハ前
世ノ事モ後世ノ事モ知りタマハバ未来記モアヤシ
ムベカラスト云ヘリ凡佛者ハ時代相違ノ事ヲモ皆
佛ノ智恵也ト云テ時代ノ前後ヲ論スル事ナリ

国史五年代記モ捨テ月ヒサル學文也年代記ニ
モ拘ハラヌ事歎ト思ハル或時ハ年代記ヲ繰算
ヘテ祖師ノ幾百年也トテ米錢ヲ取リニ来ルコ
トモアリ

一 雪隠

櫻陰齋談

宝永七年仙臺沙門梅国著三冊印行

曰客曰厨名

雪隠何之由乎答曰雪人名隠寺號昔時雪竇禪師
在具隠寺之日以司厨之職故名雪隠義堂室華集
第九賀淨頭頌軸序云古之宗門祖師發心入道必
先盡誠諸難而役于雜務職之最卑而人所甚惡
莫過于持淨然若雪竇明覺居衆司此職于靈隠至
今有雪隠之美称注曰雪竇者明覺禪師所任山号

傳在干五燈會元等具隠者寺名在河江臨安府持
淨者禪刹司厨之職見干百丈清規也○身丈曰厨
ヲ司トル職ヲ持淨ト云フハ厨ハ不淨所也故常
ニ洒掃シテ淨メサレハ弥不淨ニシテ入ルベカラズ
因テ常ニ清淨スル事ヲ勤ル故持淨ト云厨ヲ洒
淨所ト云フモ即其心也

一 朱子用佛語 同書ニ朱子用佛語ト云篇目ヲ出シ
テ朱子ノ語ヲ擧テ佛書ノ語ヲ證ニ引キテ惟實共
語不變其理將虛無寂滅之理以說性理之根本矣
ト見エタリ性理ノ學ハ程朱ヨリ始ルガ祖徠カ朱
子ヲ禪儒ト名付シハ尤ノ事ニヤ朱子ノ學ハ儒佛兩

部習合ナル歟

一著^{ツク}狗^ヲ 同書ニ客問曰和俗以^{カシメテ}私^ナ名^ヲ呼^テ做^ル狗^ノ蓋^ハ漢^ノ地^ニ

亦有^ニ此^ノ稱^ヲ哉^ト答曰元非^ニ是^レ和^ノ人^ノ隱^ニ語^ニ桂^ノ萬^ノ榮^ノ棠^ノ陰^ノ此

事^中卷^曰王^蜀時^有蕃^懷武^者主^事團^乃軍^巡之

職^也所^管百^餘人^每人^各養^私名^十餘^輩呼^之曰^狗

深^坊曲^巷馬^醫酒^保乞^丐傭^作販^賣童^兒皆^有其^徒

民間^偶語^公私^動靜^即時^聞達^於是^人心^恐懼^自疑

肘^腋悉^其狗^也懷^武殺^人不^可勝^數郭^崇韜^入蜀^乃

族^誅之^是使^察奸^慝而^及為^奸慝^者也^{見成都古今記}

目^付ヲ^用ル^ハ大^道治^術ヲ^知ラ^ヌ人^ノス^ル事^也

一神代^劍 懷^橋談^ニ出^雲國^杵築^宮ニ^詣テ^神代^ノ

神寶モ残リタルニヤト尋ケレハ抑當社ノ神室多キ中ニ

神代ヨリ傳ハル寶劍ニ柄アリシヲ元弘三年後醍醐天

皇ノ勅ニヨリ國造孝時御劍一柄ヲ奉ル賞トシテ建武

三年ニ肥後國八代ノ郷ヲ寄附シタマフ給旨也トテ

見セケル今ニ一柄ノコリタルコソ神代ヨリノ

靈劍ナレトテ見セシニ劍ヨリ柄直ニ作リツケ

タル劍也○貞文曰筑紫彦山ニテ土中ヨリ掘出

セシ劍ノ圖アリ是ニ又ヨリ柄ニテ作リツケタリ

一ト、カ、 同書ニ凡小兒ノ言語明カナラハルニハ

上ノ一字ハ云ヒ侍レトモ下ノ文字ニ移ル亦古ナラ

ハルニハ上ノカナヲオドリテ云フタグヒ多シ母上

ト云へバ、ト云ヒ父ヲ殿トイヒ亭ト云フヲト、ト云
ヒテ、ト云フカ如シ○貞丈曰ク、ト云フハ即チク、ト
云ノ訛リナリカト。ト音横ノ相通也アカサタナハ父ヲ
ト、ト云又テ、ト云ハ音堅ノ相通也タチツハ轉ジテ
ク、トナリテ、轉ジテト、トナリテ、トナル也小兒音
ノ相通ハ知ラ子ドモ是音韻ノ自然ナリカミヲ
ク、ト云ヒ殿ヲト、ト云フ説ハ非ナルベシ

一聖人之道 貞丈云聖人之道ト云へハ廣大ナル如ク
聞ユレドモ仁義ノ二字ヨリ外ニハナシ仁義ノ二字ヲ
委シク云へバ孝悌忠信ノ四字ヨリ外ニハナシ孝悌
忠信ノ四字ヲ約ムレハ仁義ノ二字也仁義ノ二字ハ車

ノ兩輪ノ如シ一方闕テハ道ニアラズ仁義ハ文武ノ道也
天ニ在テハ陰陽也學文ト云フハ仁義ノ道ヲ行フ事
ヲ學ブヲ云フ也詩文ヲ作り唐土ノ事ヲ廣ク知
リ唐土ノ風俗ヲマ子唐人ニナル事ヲスルタメ
ニハアラズ今世ハ仁義ヲ行フ人稀シニテ唐人
ハマ子バカリスル學文世上ニハヤル也詩文章
ニテ名高キ儒者ハ多ケレドモ仁義ノ德行ニテ
名高キ儒者ハ一人モナシ俗人ヨリ者テ放盪ナ
ルモアリ又新巻仁義ノ道ハ先づ日本紀
一日本紀印本之跋 印本ノ日本紀ハ跋ハ船橋清
原貞賢朝臣ノ作也其文ハ其拙ニ先づ跋ハ初ニ日本紀

ハ歴代之古史也トアリ事新ニキ詞也是ホドノ
事ハ女子小兒モ知リ居ル事ナレハ云フニ及バ
サル事也又以漢字附神代之文字傍ト云フ語ア
リ神代ノ文字トハ妄説也神代ニ文字アリタラ
ハ神代卷古事記ナトニ少ハ文学ノ事諸神書簡
ノ事アルヘキニ一向文字書簡ナドノ事ハ見ユ
神代ノ文字アラバ何カ神書ヲハ神代ノ文字ニ
テ書ナルヤ神代ノ文字ハ何ノ代ヨリ廢レタル
哉又ハ停止ノ命アリテ用ヒサル哉其事國史ニ
曾テ所見ナシ又神道ハ萬法之根柢ト云フ語アリ
神代卷古事記等ニ神代ニ法ヲ建テ道ヲ説キテ

教ヲ垂レタマヒシ事ハ一事モニハズオニオ以
テ神道ト云ヒ萬法ノ根柢ト云フヤ萬法トハ
何ヲ指スヤ吾國ニ流布スル所儒佛ノ二法ヨリ
外ニハナシ今世ニ神道ト云フ一道ハ儒佛ノ兩
道ヲ羨ミテ中古新作シクル道也日本紀ニ神道
トアルハ合ニ神祇道トアルト同事ニテ神ヲ祭
ル道ノ事ニテ今世ノ如クナル神ノ教ノ道ノ事
ニハ非ス又於神國^{イナカクニシ}神書^{ツキ}ト云フ語アリ神
國ト云フ名目日本紀古事記其外國史律令格式
等ニハ見ユズ是又中古神道ト云フ一道ヲ作り
タル時代ヨリ云ヒ出シタル名目ナルヘシ西土

日本紀神功紀ニ
神國ノ字ハアレ
其後代ニ云トハ
別也下ニ託ス

ニテ神代ト云フハ其國ヲホメテ云ハル也此方
ニテハ神道ト云フ事アルユヘ神國ト稱スルト
ハ意味違ヘタリ彼國賢朝臣ノ跋ハ神代卷古事
記十ドノ意味モ知ラス漫ニ書タル俗文ニテ西
白キ事少シモナシ

一 日本紀訓 日本紀ノ訓ハ舍人親王ノ付夕ニシ
シト云フ説アルトモ在ニハラス神代卷ハ我
國ニ文字渡リ來テ後數年ヲ歷テ文字ヲ書キ覺
工猶數年ヲ歷テ後ニ文字ノ音ヲ假リテ事ヲ記
スニ万葉書ノ様ニ書キ猶數年ヲ歷テ文字ノ置
ヤウノ違ヒハアレトモナシカヘリ急ラモ付位

ニ事ヲ記スヤウニ成リタル時代ニ至テ神代ノ
昔物語ヲ書留メタル冊子ノ諸家ニ多ク傳リシ
イタラト云フ莫モナク舍人親王取集メテワノ
中ニテ尤ラシキ事ヲ取り拾ヒ其主意ヲ以テ漢
土ノ書ノ成語ヲ交ヘ文言ヲ飾リテ書キ夕ニヒ
ニナルヘシ舍人親王ハ史記漢書十トヲ常ニ讀
ム如ク音ト訓ヲ取交テ讀セベキ為ニ文ヲ飾リ
テ書キ其中ニテモ必訓ニヨリセベキ所ニ自
註ヲ加ヘテ夕トハハ業本國此云播舉矩奈可美
此云于麻時トトテ記シ夕ニヒ也然ルニ後代
ニ至テ一字モ漏ラサズ悉ク訓ニ讀ニシトスル

故訓ニヨマレヌ字ニ強テ訓ヲ付タル故甚ハタ
コマリテ無理ナル訓ヲ付タルモ多シ徳ノ字ヲ
イキヲイト訓ヲ付タルトハコマリタル訓也
イキヲヒハ勢ノ字ノ本訓也徳ト勢ト同義ニ
非ズ如此ノ類多シ又僧ノ字ニホウシト訓ヲ付
タルハ何ノタメゾヤホウシハ法師ナリ僧ノ
字ニホウシト訓ヲ付ズトモ直ニリウト音ニテ
ヨムベキ事也ソウト云音ヲ用ヒズシテ法師ノ
二字ノ音ヲ僧ノ一字ニ用ルハ何ノ意カヤ又聖
ノ字モヒヅリ仙ノ字モヒヅリト訓ヲ付テ差別
ナシ仙ノ字ノ訓ニヨマリテ強テヒヅリト訓ヲ

付タル也此類モ亦多シ又神武紀ニ一百七十九
万二千四百七十餘年トアルヲモ、ヨロツト
セアマク、ナ、ヨロツト、セアマク、ナ、ノ
ヨロツト、タナトセアマリ、ヨホトセアマリ
ナ、トセアマリト訓ヲ付タリヨロツト云フ訓
トセト云詞アマリト云詞イクラモ重ナリテ甚
聞ニクシ七十餘ト文字ニアレハ是ハカリニハ
アマリト云訓ヲ付ベキ也イカニ上古ノ詞ナリ
トテ右ノ如ク長クシクコガマシキ詞ハアル
マシキ莫也和訓ノ秘事ナド云フ事悉信シ難シ
一 龍宮 日本紀ニ彦火火出見尊ノ塩土翁ノ教ニ

隨ヒテ海神ノ處へ渡リタヒシ事ヲ記シタル
章ヲ巫學家ノ徒稱シテ龍宮遊行之段ト云フハ
誤リ也龍宮龍神龍女ト云フ名ハ佛家ニテ
云フ事也日本紀ニハ海宮トアリ龍宮トハ云ハ
ズ日本紀ニハ海神トアリ龍神トハ云ハズ按ズ
ルニ火火出見尊ノ生シタヒトシ時脩帶ヲ切リ
タル竹カヲ棄タル所竹林ト成ル彼地ヲ号シテ
竹屋ト云フト日本紀ニ見エタリ竹屋ト云フ地
ハ大隅國肝屬郡ニモ薩摩國阿多郡ニモ有リ今
ハ鷹屋ト書ク也又瓊ノ軒尊日向國藝之高千穗
峯ニ至リタヒシ事モ見エタレハ火火出見尊

ハ薩摩大隅日向三國ノ内ニ住ミタヒシナル
ベシ彼海神ノ居住セル海宮ハ右ノ三國ヲ離レ
テ遙ノ洋ニ在ル島ナルヘシ其島ノ主ヲ海神ト
云ヒ其家室ヲ海宮ト云フナルベシ竜神龍宮ニ
ハ非ス火火出見尊海神ノ女豐玉姫ヲ妻トシテ
姫孕テ後兒産ム時化ヲ為レ龍日本紀ニアルニ依テ
カノ姫ヲ龍女ト取テシソレヨリシテ海神ヲモ
龍神トシ海宮ヲモ龍宮トシタル也是附會ノ説
也化ヲ為レ龍ト云フ事日本紀ノ本文ニアリ同一書
ニハ化ヲ為レ八尋大鯨トモ見エタリ是ハ産ニ臨テ
苦シミニ堪ズシテ匍匐仰臥宛轉其形ヲ龍トモ

躬トモ譬ヘテ云ヒ傳ヘタルヲ後ニ其事ヲ語り
傳ヘ聞傳ヘテ化テ訖トナリ躬トナリタルト書
タル物アリシヲ古ヘヨリ傳ヘタル事ナルハ舍
人親王モ其下ニ日本紀ニモ化為人ニ字ヲ用
ヒテ記シタマヘルナルベシ或云火ノ出見尊薩
摩大隅ノ地方ニ居住シタマヘハ海神ノ処ヘ渡
リタマヘヒシト云フハ琉^琉ノ二字吳音ニ唱フシ
ハルグウ也琉ヲ漢音球ヲ吳音ニ唱レバリウグ
ウ也因テ訛言ト紛ルルナルベシト云
一 譽田^{ホニ}河内國ノ地名也譽田^{ホニ}天皇ノ陵アルニ依
テノ名也然レバホニダト唱フル事本名也然ル

一 後代コニタト唱フルハ語リ也ホニ音極ノ相
通ニヘ轉訛スル歟
一 舊事本紀ノ書 舊事本紀ハ偽書也予嘗制偽ノ書
ヲ著シテ其偽ヲ明カニ辨シタリ舊事紀ト日本
紀ト其事蹟相違ノ事アリ世人學者舊事紀ハ古
キ偽書也ト云フ事ヲ知ラズ其古キニ惑ハサレ
テ實ニ聖德太子ト蘇我馬子カ真樞ニテ日本紀
ヨリ先ニ成テ古キ書也ト思ヒ語ツテ故事ヲ記
スニ日本紀ヲ捨テ必ス舊事紀ヲ引テ證トス故
ニ事蹟違フ事アリ是レ舊事紀ノ害也學者其害
ヲ知ラザル者多シ

一 巫學家 此名目古今十名目也 貞丈始メテ名
付タリ 今世神道者ト号スル者ノ所為ハ巫學ト
云フヘシ 一種ノ學文也 率弦附會ノ妄說偽書多
一 書籍校合 書ヲ校合スルニ事ヲ知りタル人ノ
校合スルニハ彼本ノ善キヲ此方ノ本ニ書キ入
テ惡キヲ其ノ消ス也 事ヲ知ラサル人ノ校合ス
ルニハ彼本ト此本トヨシクウベテ相違ノ文ア
レバ善惡ノ考ヘモナク違ヒタルホドノ変リバ
妄リニ此方ノ本ヘ書入ル故其本汚レテ却ツテ
惡本ト成リ義ノ通シ難キヤウニ成ル也サレバ
事ヲ知辨セヘタル人ノ校合シタル本ヲハ貴ブ

也惡シキ変リ書加ヘタルハ妨ケニ成テワロシ
事ヲ能ク知ラヌ人ハ妄ニ校合スヘカラスアタ
ラ本ヲ及古ニスルナリ事トハ其ノ
一 古今諸道詞 古ヘヨリ今ニ至ル間書籍ノ詞其
時代ハ一ニ用ヒ習ハシタル詞アリ心ヲ付テ其
時代詞ヲ辨ヘ覽ヘシ又諸道ノ詞ハ儒學ニハ詞
アリ醫學ニハ醫學ノ詞アリ武學ニハ武學ノ詞
アリ此外ニモ其道ニニテ用ヒ習ハシタル詞アル
儒學ニ用ヒ習ハシタル詞アリ佛學ニハ佛學ノ
者也其道ノ詞ヲ知ラカレハ其道ノ書ヲ讀
ムニ通シ難キ変アリト或人云タリキ

一類紅 予ガ弱年ノ時享保人比マテハ婦人ノ顔
ヲ粧フニホラベニホラビテ白粉ヲスリテ後ベ
ニト白粉ヲ交テ薄紅色ニシテワレヲ類ニ付テ
端ヲ散シタリ如此スレバ顔色麗シク見ユ元文
ノ初メ此ヨリ貴賤共ニホラベニラ止テ白粉ハ
カリウスクスリ或ビハ白粉ヲヌウヌモアリ何
故如此スルワト人ニ問ヒタルバ遊女ノ粧ヒテ
似セル也ト云今ハ大名高家ノ婦女モ皆此風也
風俗ハ上ヨリ下ルベキ事ナルニ今ハ下ヨリ上
ヘ昇ル事ニ成リタリ今世人男女ノ風俗ハ皆賣
妓タチ俳優ノ風タチヲ學ブ也近年世ニ學文廢レテ世

人好色利欲ヲ專ハフニシ輕薄放盪ニ成リシ故
風俗甚ハ夕賤シク成タリ此以後百年ヲ經バイ
カヤウニナラフ軟予ガ覺エテ元文ノ初メヨリ漸
々世ノ風俗モ人情モ甚シク惡シク成リタリ何
方ニ軟留メ置キ通用滞リ万民漸々貧窮ニナル
故惡クナルワトイフニ世上通用スベキ金銀ナニ
ニ隨ヒテ利欲ノ情盛ニナル故風俗モ人情モ甚
ハ夕下布ニ成リ行クニ付テ博奕盛ニニ行ハレ
火付盜賊モ多ク成タリ去レバ聖人ノ道ハ天下
ヲ富スラ以テ第一トシ教ヘラ施スラ以テ第二
トス以上予ガ云テ益ナキ事ナレドモ是モ老ノ

レノ國ニテモ四方四隅ニ外國循リテ在リ四方
四隅ノ外國ノ中ニ在ル我國ハ中國也サレバ唐
ニテモアレ日本ニテモアレ各我カ生レタル國
ヲ中國トモ中列トモ云フ也華ハハナヤカニウ
ルハシキ事夏ハ大ナル事也サレバ自國ヲ褒メ
テ中華トモ中夏トモ云フ然ルニ愚ナル儒者ハ
日本ヲ中華中夏中朝トト云ハズ震旦ノ國ノ
事ノミヲ中華中夏ト云ヒ朝廷ヲ中朝ト云ハ理
ニ當ラヌ事也一途ニ震旦ヲハ中華中夏ト云フ
モノゾト心得タルハ浅キ智也外國ヲ中華中夏
ト称スルハ己レガ生國ヲ賤シメテ夷ニスル者

ナリ

一 續日本紀 此書ヲシヨクニホニヤトヨムベシト云フ
説アリ 貞丈云吾カ朝廷ノ事漢音ヲ用ル事ハ
少ク多クハ吳音ヲ用エル例ナリ去レバ此書名
モ吳音ニテゾクニホニヤト唱フベシスベテ續
ノ字付タル和書ハ皆同ニ漢音ニテシヨクヒヨ
ニハ其下モジツホニヤトヨムヘシ
一 職員令 シヨクイニシラトヨムヘシトモ云シキイニシラ
トヨムヘシトモ云シヨクハ漢音ニキハ吳音也官家ノ事
多クハ吳音ヲ用ル例ナレバ且キイニシラトヨ
ムベシ令ノ字レウハ吳也トイハ漢ナリ

一 柏手 日本紀持統紀曰四年春正月戊寅朔物部
麻呂朝臣樹大有神祇伯中臣大島朝臣續天神壽
詞俾忘部初称也夫知奉上帝神璽劍鏡於皇后即天
位皇公卿百寮羅列迺拜而柏手焉トアリ柏手テ
ラウツト訓ヲ付テアリ柏ハ手偏也柏ヨムト柏カシハ
カシハノ字ハ木偏也何レノ時代ヨリ攷柏カシノ字
ヲ柏カシノ字一ノミ見テ柏手ヲカシハト讀誤ッ
テ神主トドノ常ノ詞ニ云ヒ別レテ手ヲ拍事ヲ
カシハト覺エカシマリテカシハト云フ義理ノ解ケ
カシキニ依テ手ヲ拍テ合タル形ガカシハノ葉ノ
形ニ似タルニヘカシハト云フトバ、無理ナル義理ヲ

取付テ其外サレノ説ヲ作ッテ神秘也トド、云
也元ハ文盲ニテ手偏木偏ノ差別モ知ラズ讀誤
タルガ後ニ秘説口傳トド、云フ事ニナリタルハ
笑フベキ事也拍手、亥ハ上古我國ノ礼ナリ
一 讀天神壽詞 右ニ見エタリ其外古書ニ見ユク是
ハ神代卷ニ天照大神ノ神寶ヲ皇孫ニ讓授ケタ
レヒシ時ノ御詞アルヲ傳ヘテ其時ノアリサレ
其御詞ヲ中臣稜ノ如ク文ニ作りタルヨミ物
アリシナルベシ今モアルヤイカバ知ラズ
一 螺鈿金器物ノ飾リニ青貝ヲ貼タルヲ云フ鈿トハ
カリ云フハ金ニテ華形トトテ作ル如ク螺貝ニテ華形

十ドラ作りテ貼ル故螺鈿ト云螺ヲ鈿ニスルト云々
事也金鈿ト云テ飾リタルハ金螺鈿トモ螺鈿ト
云フヘキ物器物ノ飾リニ貼ルノミナラズ筭ナ
ノ頭ニ金ニテ華形十ドラ作りタルモ鈿ト云フ也
鈿ノ字玉篇ニ徒練ノ切金花也又音曰字彙曰金
華飾又螺鈿ノ韻學集成曰以寶貝飾器也或作鑽
鑽鈿字リノ○貞丈曰唐土ノ青貝ハ色美ナラズ曇
リテ見エ其製漆地ヨリ青貝高ク出タル多シ琉球
ノ青貝ハ色美ニテ光彩強シ其製漆地ト共ニ平
也貝ヲ用ユルニ紅紫綠緋ノ色ヲワケテツカフ
也其細ニ唐人ノ及バザル所也又日本ノ青貝ハ

物貝ヲ用ユルニハウ子トシタル理見ユル也
琉球ノ青貝ハウ子ト見エズ琉球ノ青貝ハヤコ
貝ト云フ物ヲ用ユ屋久嶋ヨリ出ル貝也九ノ細
長シ青貝ノ色ニ光ル所アリ白キ所アリ白キ所
ハ巾着十トノ緒シメノ玉ニ作ル潔白ナル物也
ト薩摩人ノ談也其人ノ所ニカノヤコ貝ヲ午水
鉢ニシテ置タリト云大ナル物也
一ハフト云出薩摩人ノ談曰琉球ニハフト云出
アリ長サ一尺餘頭丸ク身細ク飯ヒノ形ノ如シ
色黒シ樹ノ枝又ハ家ノ内鴨居ノ上十トニ居テ
人ノ通ル時カノ出頭ヲ以テ人ヲ繋ツ甚痛ニ甚

シク毒氣身ニ徹リテ苦シム早ク療セガレバ死
 スト云フ去レバ琉球ニテハ夜行ニハ必ス木履
 ヲ用ユ木履ノ音ヲ聞ケバ虫近ツカズトナリ奇
 事ナレバ記レ之

一 推標之假字 俗ニ推ハ志^シと書^ス一 標ハ^ハい^ハら^ルと
 書^ス一 一^ハシ^ハハ^ハ瑞^ク也 和名妙^ク推^ス之^ニ比^シ標^ハ以^テ知^ル比^ト云^フ
 ひのくま^トと^リ和^スひ^ハく^ハの^クま^ハの^クす^ハ標^ハ此^ノ字^ニ
 乃^ハ和^ス一^ハし^ハた^ハより^ハく^ハけ^ハれ^ハ本^ハの^ク和^スと^ハ志^ハの^クひ
 くのて世^ハと^ハふ^ハふ^ハある^ハハ^ハ後^ハを^ハ推^スと^ハて^ハ
 一^ハつ^ハや^ハ後^ハハ^ハ志^ハの^ク推^スハ^ハ志^ハの^クひ^ハなり^ハ 和^スぬ^ハか
 ん^ハは^ハひ^ハや^ハ志^ハの^クひ^ハなり^ハ 世^ハハ^ハ後^ハ代^ハの^ク和^スぬ^ハの^クな

つ^ハひ^ハ遠^ハひ^ハる^ハ歌^ハる^ハと^ハあり^ハ 標^ハ層^ハの^ク志^ハの^クは^ハの^クら
 志^ハの^クな^ハる^ハ和^スぬ^ハ蓋^ハナ^ハと^ハ遠^ハひ^ハる^ハと^ハて^ハる^ハ和^スぬ^ハなり^ハ
 の^クひ^ハの^ク相^ハ違^ハう^ハ 又^ハ和^スぬ^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハ位^ハ山^ハの
 標^ハ乃^ハ和^スぬ^ハ一^ハ標^ハハ^ハ位^ハと^ハや^ハる^ハ一^ハて^ハ後
 志^ハの^クや^ハと^ハ後^ハあり^ハ是^ハ又^ハ標^ハハ^ハ位^ハナ^ハと^ハなり^ハ
 音^ハ別^ハる^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハと^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハなり^ハ 俗^ハ傳^ハの^クなり^ハ
 又^ハ韻^ハ字^ハの^ク和^スぬ^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハハ^ハ古^ハ書^ハニ^ハ合^スる^ハ多^ク一^ハ用^ハ
 一^ハし^ハ 近^ハ年^ハ京^ハ新^ハの^ク古^ハ書^ハ標^ハナ^ハ古^ハの^ク書^ハ
 引^テテ^ハる^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハと^ハ志^ハの^ク和^スぬ^ハこれ^ハ古^ハ書^ハの^クなり^ハ
 ひ^ハ能^ハ合^スる^ハ一^ハ 又^ハ古^ハ標^ハの^クなり^ハつ^ハひ^ハの^ク書^ハ多^クあり^ハ
 志^ハの^ク和^スぬ^ハ古^ハ書^ハニ^ハあり^ハる^ハなり^ハ一^ハ

一カ之小尻 古書ニハカノ鞘尻トアリ盛衰記長
門本ノ平家物語等ニ見エタリ小尻ト云フ名宗
五記大永年中ニ見エタリ今ハ專ハラ小尻ト云
按和名抄居宅具ニ瑞ノ字ノ下ニ文選云裁金壁
以飾瑞音當師説又耳瑞見利劉良曰言以金壁飾椽端
也トアリ然レハ家ノ椽ノ端ヲ金壁タニニテ
飾ルヲ瑞リト云也其義ニ准シテカノ鞘ノ端
ニ金物ヲ入テ飾リタルヲコジリト云フナルベ
シ金物ヲ入ガルハコジリト云ベカラズサレド
モ轉用シテ金物ヲ入レガルヲモコジリト云習
ハエタルナリ

一國初 萩生惣右衛門兵ニ彼門人ノ書タル文ニ
東照宮ノ御代ヲ指シテ國初ト云ヘルハ大謬也
異國ニテ他姓ノ人天子ヲ弑シテ王位ヲ奪取リ
新夕ニ國号ヲ建テタル其天子之時代ノ事ヲ其
子孫ノ代ヨリ指シテ國初ト云フ也日本ニテハ
他姓ノ人天子ヲ弑シ王位ヲ奪ヒ天子ニ成リテ
新夕ニ國号ヲ建タル事ナシ日本ニテ國初ト云
ハ國常立尊人時代ヲ指シテ云フベシ
東照宮天子ヲ弑シタニハ不王位ヲ奪ヒタニハ
不新夕ニ國号ヲ建テタニハ不然レハ國初ト云
ベキ理ナシ然ルニ國初ト云フハ

東照宮ヲ以テ篡奪ノ逆臣トスル也恐レ憚ルベ
キ詞ナリカノ荻生家ノ文章ハ古雅ニシテ巧ナ
ル事ハ巧ミナルベケレバ元日本ニ生レテカ
日本ノ事ヲ能ク辨ヘ知ラサル故国初トド
ク言フ言ヒ出スセ何ホド文字ノ置ヤウハ巧也
トモ辞ヲ知ラズシテ只唐ノキタルバカリニテ
ハ偏ニ一場ノ戯文ニテ百代ニ傳フベキ文章ト
ハ言フヘカラスベテ儒士ノ文章ニテ將軍家
ヲ指シテ官家ト称スル者アリ官家トハ天子ノ
事也將軍ヲ官家ト称セバ天子ヲハ何ト称
スベキヤ是モ事ヲ辨ヘ知ラズ也

將軍家豈非礼ヲ称ヲ悦ビタニハニ哉今ノ儒者
ハ物知ラズノ愚人多シ万卷ノ書ヲ讀ミ文章ニ
達シタリトモ異國ノ事バカリ知テ吾國ノ事ヲ
知ラズハ吾國ニハ益ナキ人也是物ニラズノ愚
人ニアラズシテ又何ゾヤ是ヲ名分ヲ腐儒ト云
ハ唐唐トクニハキケトモ愚者ノトクサレタ
儒者ハ唐人ノ屎ト云フ也負文
一内侍所古今著聞集卷一神祇部内侍所ハむろ
清添ぬまきめやくれまろやれけりとおのり
りてこれの事ハ何ハとれおれりてとて温月
あまのりてまきりりけりこれのいとけり

くお、何のうな、この殿は、
何とて、用侍、さうよら、
と、言、く、志、ま、あ、き、く、ま、り、け、り、と、と、云、使、内、裏、
亡、小、神、鏡、
よ、の、ら、せ、給、ひ、
小、月、鏡、
の、ま、あ、乃、神、
と、と、ぬ、ら、ち、
中、傳、
此、傳、
来、申、云、火、氣、
温、明、殿、
有、鏡、面、其、徑、八

寸、頭、雖、有、一、瑕、圓、規、甚、以、分、明、露、出、
者、無、不、驚、此、御、記、
此、お、何、の、う、な、
き、れ、と、し、
の、
と、
あ、け、
う、
か、
ゆ、

らと分新まいりあ人あしじきこたり 著聞集建

長六羊橋
南表記之

一古銭 享保年中ノ此一デハ一貫文ノ銭ノ中ニ
ハ古銭イクラモ文リテ有リニ開元熙寧洪武皇
宋大觀大中太平通寶ノ類アリ永樂十トハ最モ
多文リテ有リニガ近年ツク銭鉄ノミ世ニ行
ハレ銅銭ハ何方ニ留メ置クヤラニ今ハ少シ銅
銭ノ隠ルニ隨ワテ古銭ハ強々ナクナリタリ
此僅ナル一輩モ亦世愛ノ一ナリ治世ニハ僅十
ル事ヨリ漸々ニ変ニ行也故ニ何ノ時ヨリ夏夕
ルト云フ事ヲ知ラズ乱世ニハ俄ニ大ニ変スル也

一吉野名竹 享保五年庚子夏武列駒場乃御榮園

御用屋敷乃領ノ桂村左平次政勝採葉の
台舎と兼奉リ其時より寶曆三年矣因近間斷
乃三十余年採葉のゆわゆ諸國と巡行し法由
りて人のゆがは下りてんゆと巡見し葉物ノ事
ハ云よ及ぶす奇事其又今ノ下言記し其又今
九卷の書小なりして寶曆五年丙子に秋上りけり
巻数申繁けぬハ昔事のゆと約て正れと云よ
りく抄漏して奉りぬ昔事と名つけて諸列採葉
記抄録と云く一卷なり古大和國の御其又今
本照神君の 命又依く古中山の内より古此名

竹堂リ山矢亦ト毎年大坂津城ニ或千或百死上ト
とやリアリうリ此事奇事ナルトアリルト武
玉ノ事ナルト後ノ考メルト馬五也

一 殺生石 右同書下野國の郡云於此中殺生石也
酒が嶽の麓より石を流しと云彼殺生石と云割
て孫子と見又よりて味と考案とよりて常
乃石も考案と申す此石は右院天皇より出
此山乃温泉涌出の時殺生石の在る場所と云
此ハ禽獸ノ之ノ力ヲ以テ忽ニ死ス也ト云フ中ノ彼ノ殺生石
ハ少割て持来ニツツ上ル云フ

一 身延山奥院本尊 右同書甲斐國の郡云身延山

久遠寺仁王門ヲ表同ノ口ノ十三
同抄七回也 又リ石塔三百六十

口ノ上ル二所余ノ中ノ卷
南ノ向ノ木ノ柵ヲ包ム云フ大園秀吉
の建立ノ始末ヲ立テ記ス云フ此ノ寺ノ奥ノ院也本ノ尊ノ像ノ向
の活活とリハハ弥陀ノ前ニハ証証一天四方程程を撞
出ル云フ

一 丹波鬼城 右同書丹波國の郡云鬼城ノ云不
知レ其ノ名ノ先ノ人ノ信ヲつク又カるト云フ今ノ所ノ有ル身
石垣ありて石籠ありの如し今ノ内ニ三ノ男ノ入リ込
えテ今ノ奥ノ方ハ石垣崩れて沙ノ一ノ道ヲ一ノ丹波
城ト云フ習シタリ
元ハ丹波丹波後國ナリ

一 富士人元 右同書信濃國の郡云富士の人元ノ云

みづの物布とてしる事と界しるも同也
つろとつろ網布の二字代あてし書くハ義は
ふとほやまのり

人名唱以字音 世ニ名高キ人ノ名ヲハ字音ヲ以

テ唱フタトハ道風ヲバタウフウ俊成ヲハシニ

ゴイ定家ヲハテイノ家隆ヲハカリウト唱フル類也

ト云説アリ按スルニ音ヨリ如此アリシニヤ古

今著聞集卷十六奥言 士生ニホ家隆の家よてあり

人め子と男とがす侍事なり 自丈云男ニナストハ隆

李彌長のみとて 自丈云子ニナル事ナリ やうくのの

細長ハ冠ハ一け 自丈云加冠トハ正おシオヤ 名とん

何とら竹魚きふと治はしけ 自丈云エホシオヤヤエ

あつみの三廊居候とりの田舎さひ ホシ子ニ名ヲ付ルナリ ひ聞て逃み

出ていひりハ 自丈曰此殿トハ家隆 佛一丸

隆乃字をあり 家トサシテナリ 終つじりたふとや竹ふ

せらる 自丈云 ひの

ひの 名葉ノ

居候又書名は聞 通リ字

と名 此此

い 此此

て 此此

さ 此此

し 此此

ら 此此

ま 此此

ま 此此

テ行クト云傳ハタリ若シ老馬ナキ時ハ風ヲ以
 テ北方ヲ知テ道ヲ尋ヌベシ嗚呼風ハ小虫ニシ
 テ穢ハシキ物ニシテ人ニ悪ニルト云ヘトモ
 北方ヲ知テ人ヲ助ルノ能アリ人トシテ一ツノ能
 モトク放盪ニシテ悪事ヲナシテ人ノ害ヲナス
 者ハ風ニハ劣リタル者ナリ

一紀負之假字序 古今著聞集卷十四 此説云亭子

院ノ時昌恭元年九月十一日大井川ニ河守あり
 下テ紀實之和融此假名序あり

あまのつゆを君代に代るが月のこころぬりのゆり
 雲のひらひらてのこころきくみなまごころのこころ

ぬき秋とねしむねしこきて月乃うづれこ
 ろの梅はしるゆりのよきひてつしそ
 るとちして夕月夜小舎れ山の月をゆり
 乃井川色こみきりていぬるぬるのふい
 るまひゆるきんがくみきりてふりひなり
 海に水はせしむにこころちりいありてあやんを
 しとくつとみこころのうして傳ふことは
 秋のあまのつゆひらひらこふれまふとあやま
 くれ秋の山をふれいふひまふきりしと
 あまのつゆを君代に代るが月のこころぬりのゆり
 るとあまのつゆのこころぬりのこころぬり

一 云云 古書ノ文ナドヲ引キテ書ク時其文ヲ下畧
 スルニ云ト書ク也俗ニハ何々トアリト云也
 ニ云云ト書クハ非ナリ

一 々々 同字ヲ童子テ書クニ俗ニハ夕トヘバ悠悠ヲ
 悠々ト書ク也唐ノ書ニハ悠ヒ或ハ悠ニヨクセテハ
 ナド、書テアリ真字ノ文章ニハ如此書クベシ
 片假字交リニ書クニハヒニナド、書テハ片假
 字ニ紛ル、故悠々悠々ナド、モ書クナリ

一 カナツカヒ五類 五類ト云ハ ○いゑひ
 ○は は フトヨム ○あ ○ほ は フトヨム ○たを ○へ へ
 トヨム 白忍 ○う ふ ふ トヨム 是也世類や けいひ

まろややろなつうひと云うなほうひ乃書らん
 まろは 徳字なり 書一 一 定ぬめりなつうひと書
 ありまがさまろくろなほひと教ふ書秘録
 下母くはろろあやまろろ事もろろ古言候
 いろやろろろ

一 大口魚松魚字 夕ラヲ大口魚又吳魚ト書クハ
 朝鮮國ニテ用ル字セカツラヲ松魚ト書クモ亦
 同シ唐山ニ夕ラモカツラモナキ故漢字ナシ漢
 字ナクハ吾國ニテ用ル所ノ鰹夕ラ 堅魚カツラ
 字又鰹カツラノ字ヲ用ユヘシ朝鮮ノ文字ヲ本ニ
 スルニハ及ハガル事也漢字ナラバ本ニスベキ

和歌三神 前ニモ云フ如ク何々ノ三神ト云フ
事ハ阿弥陀ノ三尊ノ子ヲシテコシラヘタル
度也和歌三神ハ人磨呂ト住吉玉津島ノ西神也
ト云フ中尊ニ人磨呂ラシテ左右ニ兩神ヲ置ク
事心得カクシ中尊住吉ナルベシ神代ノ神ナル
故時代モ古ク位モ貴シ右脇ハ玉津島ナルベシ
玉津島ハ衣通姫ニテ允恭天皇ノ妃ナレバ人磨
呂ヨリハ位貴シ右ハ左ヨリ貴キ方也左脇ハ人
磨呂ハ臣下ニテ位卑シ時代モ衣通姫ヨリ後也
三尊ノ座位ヲ以テ論スル時ハ如此也又曰人磨

呂ハ歌ノ上座也ト云傳ヘタルハ人磨呂ハ歌
ノ神トモ云ヘキ欽住吉玉津島ハ歌ノ神ナルベ
キイワレ日本紀古事記等ノ正史ニハ見エズコ
レヲ歌ノ神トスルハ哥學者流ノ私ニ作りタル
偽書ニアル事ナルベシ衣通姫ノ歌トテ
左ノ如ク又ル也ト云々人磨呂ハ
和歌ノ後人ノ偽書也
日本紀ニ衣通姫ノ歌見エタリ其時代ノ歌トハ
風跡大ニ違ヒタリ右ノ歌ハ後代ノ風跡也古今
集ノ貫之カ序ニハ下照姫素盞鳥尊ヲ歌ノ祖ト
スル赴キニ書タリ又人磨呂帝人ハ歌ノ上座也

申見ユタリ貫之カ帝ニハ住吉玉津島ノ事ハ見
エス右衣通姫ノ歌後人ノ偽作ナル事ハ予カ書
タル赤島ト云フ草紙ニ委シク辨シタレバコト
ニハ畧之此哥佛法ノ詞ナリ衣通姫ノ時不ニダ
佛法渡ラズ

一古史 日本紀推古天皇廿八年ノ紀曰是歲皇太
子嶋大臣吉議之録ニルニスラミトノフミ天皇記及國記クニツクミ臣連伴造國造
八十部トモ等オシタノ本記モトツキ皇太子ハ聖德太子也
世俗今ノ舊事本紀也ト云フハ謬リ也右ノ皇太
子嶋大臣ノ記録セウレシ書ハ皇極天皇ノ御時
蘇我入鹿カ乱ノ時燒天ノ傳ハラサル也皇極天

皇四年六月ノ記ニ巳酉蘇我臣蝦夷ミス入鹿カ等臨
誅悉燒天皇記國記珍寶船史惠尺コヒトエ即疾取所燒國
記而奉中大臣ト見ユタリ其時國記ハアリ燒ス
シテ天皇記ヲ始メ皆燒失タリ其時國記ハ世在
ル所ノ舊事本紀ハ燒残リタルト云フ國紀ハ無
クシテ燒失タルト云天皇紀其外ハ有リ大ナル
偽作物ナリ古キ偽書ナル故古人モ惑テ多ク引
用ヒタリ右ニ載フ如ク聖德太子馬子ノ録サレ
ニ書ハ燒失シテ傳ハラズ燒残リシ國記モ今ハ
傳ハラス惜ムベキ也又天武天皇十年二月ノ
紀ニ丙戌天皇御于大極殿以詔川嶋皇子忍壁皇

子廣瀬王竹田王桑田王三野王大錦下上毛野君
三十小錦中忌部連首小錦下阿曇連稻敷難波連
大形大山上中臣連大嶋大山下平群臣子首令記
定帝紀及上古諸事大嶋子首親執筆以錄焉下見
エタリ此書今ハ傳ハラズ可レ惜々々舍人親王
日本紀修撰人時ニ此書存セル歟否詳ナラズ
一古律令日本紀天智天皇十年正月甲辰紀ニ東
宮太皇弟奉宣或曰本大友皇子宣也施行冠位法度之事大
赦天下法度冠位之名持統天皇四年四月紀ニ
庚申詔曰百官人及畿内人有位者限六年無位者
限七年以其上日選定九等四等以上依考仕令以書

善最功能氏姓大小量授冠位下同九月乙亥朔詔
諸國等曰凡造戶籍者依戶令也云々考仕令戶令
ハ其時ノ令ノ篇ノ名也

一禁式日本紀天武天皇十年四月ノ紀ニ辛丑立
禁式九十二條因以詔之曰親王以下至干庶民諸
所服用金銀珠玉紫錦繡綾及氎袴冠帶并種々雜
色之類服用各有差辭具在詔書

一墓記日本紀持統天皇五年八月記ニ辛亥詔ニ十
八氏大三輪雀部石上藤原石川巨勢膳部春日上
毛野大伴紀河部佐伯末七穗積阿曇平群日
田上進其祖等墓記○此時代既ニ墓記アリシヲ
知ルハシ

一 即位礼儀古式 日本紀允恭天皇紀元年十二月
ノ紀ニ於レ是群臣大喜、即日捧、天皇之璽符、再拜、上
馬皇子曰群卿共為天下、請、寡人、寡人何、敢、遂、辭、乃
即、帝位、○孝德天皇紀ニ輕皇子不得、固、辭、升、壇、即、
祚、于、時、大、伴、長、德、字馬連、帶、金、鞞、立、於、壇、右、丈、上、健
部、君、帶、金、鞞、立、於、壇、左、百、官、臣、連、國、造、伴、百、八十、部
羅、列、匝、拜、○持統天皇四年ノ紀ニ春正月戊寅朔
物部、麻呂、朝、臣、樹、大、盾、神、祇、伯、中、臣、大、島、朝、臣、讀、天
神、壽、詞、俾、忌、部、禰、色、夫、知、奉、上、神、聖、釵、鏡、於、皇、后、
公、卿、百、寮、羅、列、匝、拜、而、拍、手、ト見、エ、タリ、其、詳、ニ委
細、ナル、莫、ハ、知、レ、サ、レ、トモ、其、大、略、ハ、右、ノ、文、ニ、テ

知ルヘシ是我国ノ即位ノ古式也其後文武天皇
ヨリ我国ノ古式ヲ捨テ唐朝ノ礼ヲ模サレシユ
ヘニ裝束ヨリ始メテ諸事唐風ニ成リタルナリ
是ヨリ後代ニ至テ唐礼ヲ用フル

一 侍讀 尚復 侍讀ハ天子ニ讀書ヲ教テ奉ル職
也初メ侍讀奉教ノ後尚復其章句ヲ復シ申サレ
ル職也義知常ニ此職名ナシ御讀書ノ時ニ定
メラル、ナリ

一 假字文 男メツタリテ序ノ外ノ文カクハ其之
ノ事ナク乃序同大井川ノ事和歌ノ序亦其類
の事ナク乃序同大井川ノ事和歌ノ序亦其類

海氏抄治枕草子と云ふ事にして書卷一留のくみ文
よ海氏抄草子と云ふ事と云ふ事にしてのけむ女と云ふ事
は事公はるがごとくして文と云ふ事と云ふ事と云ふ事
のりやふと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
氏女々千所代の信治多して同云しかる事ありし
又云乃文と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
田へ事ハ年号又ハ座人の名座の地名と云ふ事と云ふ事
幸号と刻し書事ハハハハ又官位乃名と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
紀ニ朱鳥ヲアキミドリト注シタルハ後人ノ
加筆トベシ大化ヲバオホバケトバヨニス

一倭奴校 五雜組曰夷狄諸国莫^レ礼^レ義^レ於^レ朝鮮莫^レ膏
朕^レ於^レ交^レ趾莫^レ得^レ於^レ鞞^レ莫^レ校^レ於^レ倭^レ奴莫^レ醉^レ於^レ琉^レ球莫^レ
富^レ於^レ真^レ臘云々倭奴ハ日本ナリ校ハ校猶也ワル
カシコキヲ云フ也日本ノ風俗豈上古ヨリ校ナ
ラニヤ五雜組ハ明ノ代ニ謝肇淛ト云フ人ノ著
シタル書也後代ニ及テ校トナル耳
一日本不^レ臣^レ于^レ元朝 五雜組曰元之盛時外夷朝貢
者千餘国可^レ謂^レ窮^レ天^レ極^レ地^レ固^レ不^レ賓^レ服^レ而^レ惟^レ倭^レ之^レ崛^レ強^レ
不^レ臣^レ阿^レ刺^レ罕^レ等^レ率^レ帥^レ十^レ萬^レ征^レ往^レ得^レ返^レ者^レ三^レ人^レ耳云々
阿^レ刺^レ罕^レカ^レ日^レ本^レへ^レ攻^レ来^レツテ^レ亡^レヒタルハ後宇多院
弘安四年人事ナリ

一和版五雜組脫文 卷第四地部二四十一葉西南海外

諸蕃馬八兒俱藍二國朝貢計其所得不足償所費

之百一也以上在干和版國朝西蕃天方默德那最

遠蓋玄特取經之地相傳佛國也其經有三十六藏

三十六百餘卷其書有篆草指三法今西洋諸國多

用之又有天竺國更在佛國之西其人通文理儒雅

與中國無別有玊瑪寶者自其國來經佛國而東四

年方至廣東界其教崇奉天主亦猶儒之孔子釋之釋

也其書有天主實義性之與儒教互相發而於佛

老一切虛無苦空之說皆深詆之是亦逃楊之類耳

玊瑪寶常言彼佛教者竊吾天主之教而加以輪迴

報應之說以惑世者也吾教一無所事只是欲人為

善而已善則登天堂惡則墮地獄永無穢度永無輪

迴亦不須面壁苦行離人出家日用所行莫非脩善

也余甚喜其說為近於儒勸世較為親切不似釋而

氏動以恍惚支離之語愚駭庸俗也其天主像乃一

女身形狀甚異若古所稱人首龍身者○與人言文貞

疑與字上當玊瑪寶字蓋脫文干恂々有禮詞辨扣之不錫異域

中亦可謂有人也已後竟卒於京師以上文唐

禁十爾故和版又同卷五十一葉孔子當衰周

章之下来政和問章之上和版脫下唐本云韃

韃之捍獍而敬信佛法愛禮君子得中國冠裳皆不

教即配以部落婦女見一僧至輒膜拜頂礼不敢褻
慢倭奴亦重儒書信佛法凡中國經書皆以重價購
之獨無孟子云有獲其書往者毋輒覆溺此一奇事
也以上之文唐本アリ和坂ニ脱タリ

一石川丈山 詩人也或書曰元和元年五月大攻陣
ノ時吾カ 將軍ノ戰士石川加右衛門進シテ一
番ニ敵ノ上下ノ首ニツ取タリ然レトモ軍令ヲ
破リ拔ケ撤ノ働キナレハ改易シマヘリ加右
工門退隱シテ石川丈山ト号ス彼我人移時高關ハ
御書院番ニテアリシナリ此文山前詩益孝疑建
タリ



